熱傷瘢痕癌 47

——当科における熱傷瘢痕癌——

——寺内 雅美* 見寺 絢子*——

昭和51年1月開設以来、当科を訪れた熱傷瘢痕癌は6例と少ないが、このうち、興味ある症例について若干の考察を加えて報告する。

症例は70歳女、昭和20年東京大空襲で左前腕に熱傷受傷、瘢痕治癒したが昭和58年より同部潰瘍を形成してきた。昭和59年8月28日初診。

生検にて扁平上皮癌と診断、左前腕切断をすすめるも患者に拒否され、Lineac 照射、化学療法とを併用し、腫瘍切除と植皮術を行った。このような症例の治療方針と、今後の問題点について諸先生のご意見、ご教授を賜りたい。

* Kazumi TERAUCHI, Junko MIDERA: 昭和大学藤が丘病院形成外科

皮膚浸潤細胞の動態 48

——菌状息肉症の治療前後における皮膚浸潤細胞の動態について——

岩原 邦夫*¹ 庄 国康*¹ Y. Hantanyapong*¹
清原 明*¹ 小川 秀興*¹ 石田 康生*²

菌状息肉症の皮疹の浸潤細胞を各種モノクローナル抗T細胞抗体を用いて分類同定し、かつ電顕酵素抗体法を用いT細胞の Nuclear contour index (NCI) を測定し、病期との関連性を検討した。その結果、病期の進行に伴ってサプレッサー／ヘルパーT細胞比の減少が認められた。一方T細胞の NCI は病期の進行に伴っ

た増加が認められた。また浸潤性局面と腫瘤を伴った菌状息肉症の典型例に nitrosourea 剤の一種である ACNU の外用およびインターフェロン α の局注を行い、その治療前後における浸潤細胞の動態を光顕的および電顕的に比較検討したので併せて報告する。

*1 Kunio IWAHARA, Kuniyasu SHU, .Y HANTANYAPONG, Akira KIYOHARA, Hideoki OGAWA: 順天堂大学皮膚科学教室

*2 Yasuo ISHIDA: 順天堂大学病理学教室